

芥川龍之介・作 仙人 より抜粋

「ついでには兼ね兼ね御約束の通り、今日は一つ私にも、不老不死になる仙人の術を教えて貰いたいと思
います。」

権助にこう云われると、閉口したのは主人の医者です。何しろ一文も給金をやらずに、二十年間も使
った後ですから、いまさら仙術は知らぬなぞとは、云えた義理ではありません。医者はそこで仕方なし
に、

「仙人になる術を知っているのは、おれの女房の方だから、女房に教えて貰うが好い。」と、素っ気なく
横を向いてしまいました。

しかし女房は平気なものです。

「では仙術を教えてやるから、その代りどんなむずかしい事でも、私の云う通りにするのだよ。さもな

いと仙人になれないばかりか、また向う二十年の間、御給金なしに奉公しないと、すぐに罰が当たって死んでしまうからね。」

「はい。どんなむずかしい事でも、きつと仕遂げて御覧に入れます。」

権助はほくほく喜びながら、女房の云いつけを待っていました。

「それではあの庭の松に御登り。」

女房はこう云いつけました。もとより仙人になる術などは、知っているはずがありませんから、何でも権助に出来そうもない、むずかしい事を云いつけて、もしそれが出来ない時には、また向う二十年の間、ただで使おうと思ったのでしょうか。しかし権助はその言葉を聞くとすぐに庭の松へ登りました。

「もっと高く。もっとずっと高く御登り。」

女房は縁先に佇みながら、松の上の権助を見上げました。権助の着た紋附の羽織は、もうその大きな庭の松でも、一番高い梢にひらめいています。

「今度は右の手を御放し。」

権助は左手にしつかりと、松の太枝をおさえながら、そろそろ右の手を放しました。

「それから左の手も放しておしまい。」

「おい。おい。左の手を放そうものなら、あの田舎者は落ちてしまっぜ。落ちれば下には石があるし、とても命はありやしない。」

医者もとうとう縁先へ、心配そうな顔を出しました。

「あなたの出る幕ではありませんよ。まあ、私に任せて御置きなさい。——さあ、左の手を放すのだよ。」
権助はその言葉が終らない内に、思い切って左手も放しました。何しろ木の上に登ったまま、両手とも放してしまったのですから、落ちずにいる訣はありません。あつと云う間に権助の体は、権助の着ていた紋附の羽織は、松の梢から離れました。が、離れたと思うと落ちもせず、不思議にも昼間の中空へ、まるで操り人形のように、ちゃんと立止ったではありませんか？

「どうも難有うございませう。おかげ様で私も一人前の仙人になりました。」
権助は叮嚀に御時宜をすると、静かに青空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇って行ってしまう。

入力:j.utiya

校正:かとうかおり

1999年1月5日公開 2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル:このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。